日本史Ⅰ

社会科教育講座・川岡勉

① 授業の基本情報

この授業は２回生以上を対象とする「教科または教職に関する科目」であり，社会科における基本的な教養として，日本史における主要なテーマを取り上げて考察し，日本社会の特質を理解することを目的とする。

到達目標として掲げたのは，(1)日本における国家と社会の歴史に関する基礎的な知識を獲得する，(2)日本史を中国や朝鮮など東アジア世界との関わりにおいて捉える視点を獲得する，(3)日本の国家と社会の歴史を踏まえて，これからの社会のあり方や改革の方向について，自分の考えをまとめ論述する力を身につける，の３項目である。

関連するＤＰは，教育に関する確かな知識と，得意とする分野の専門的知識を修得している（知識・理解），である。

学校教育教員養成課程の初等教育コース（幼年・小学校サブコース）の学生 21 名（２年生），同課程の中等教育コースの学生９名（２年生），学校教育教員養成課程学校教育基礎コースの学生５名（４年生）と法文学部の聴講生２名の合計 36 名の学生が受講した。

授業で取り上げたテーマは，概ね例年通りであった。

② 授業評価・授業研究の内容

授業の進め方としては，あらかじめ次回のテーマについて調べてきてペーパーにまとめさせておき，授業ではそれを読み上げさせながら，授業者が解説を加える形をとった。毎回の授業で提出させたペーパーと，最終試験をもとに成績評価を行った。

最後の授業時に授業評価アンケートをとり，32 名の学生から回答を得た。

まず，この授業は教員にふさわしい資質を育てる上で役にたつと思うかを問うたところ，17 名が「とてもそう思う」（前年度 20 名），14 名が「ややそう思う」（前年度 10 名）と回答し，１名が「あまり思わない」（前年度０名）と回答した。

そう判断した理由として，歴史事象を暗記するのではなく「様々な角度から多面的に考える」という学習内容，「教科書や新聞・各種データなど資料をどう活用するか」という資料の扱い方，「予習し，自分の言葉でまとめた上で授業に参加し，発表等もする」という授業スタイルなどに賛同する意見が寄せられた。

自分はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだと思うかを問うたところ，「とてもそう思う」が 11 名（前年度 14 名），「ややそう思う」が 20 名（前年度 16 名），「あまり思わない」が１名（前年度１名）という結果であった。

授業の目的・到達目標に照らしてどの程度達成できたかを問うたところ，90％・８～９割・７割などの達成度を挙げる学生がいる一方で，基礎知識は獲得できたかが論述する力は不十分とか，簡潔に説明できる程度という声もあり，ばらつきがある。授業の改善すべき点を問うたところ，学生どうしの話し合いの場があればよいという意見と，毎回の提出ペーパーを添削して誤りがないか教えて欲しいという声がそれぞれ複数寄せられた。

授業内容はおおむね肯定的に受け入れたとみてよく，毎時間あらかじめ調べて授業に臨ませる形態も，学生を授業に主体的に取り組ませる上で効果を挙げたと考える。学生は各自が調べた史実を全体で共有することにより，多角的な視点から歴史を考える機会となったようである。授業者は様々な資料やデータを提示して歴史の流れを説明することで，暗記教科というイメージを払拭するように努めたが，学生の声を踏まえてさらなる授業の充実に向けて引き続き検討していきたい。

③「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

アンケートの中に，日本史を東アジア世界の中で捉えるという視点を評価する意見や，「地域に関わる話を多くしてくれたので，愛媛で教員をしようとする人にはためになる」などの声があった。地域史の重視は歴史教育において有効であり，今後とも力を注いでいきたいと考えている。